

韓竜雲の生涯と思想小考

許 油

1. はじめに

韓竜雲は韓国仏教の巨星であった。彼は1919年の3・1運動家として、2・28独立宣言書作成者の33人の中のひとりだった。韓竜雲についての研究は韓国、日本、欧米各国において幅広く研究されている。今回私は韓竜雲について、韓国仏教の指導者として反日運動を行ったこと、また民族主義仏教指導者を養成し仏教改革を推進したことを紹介したい。

2. 韓竜雲の生涯

韓は1897年（高宗16）から1944年に活動した仏教僧侶であるが、独立運動家でもあり、また韓国文学界の詩人でもあった。

本名は韓貞玉であるが、出家後韓竜雲と名乗った。竜雲は僧名である。また仏教界においてよく知られ、「萬海」とも呼ばれた。「萬海」とは海のように広く活動したという意味である。

韓は韓国の儒教が盛んになった忠清南道洪川という田舎で生まれた。6歳の時から儒教を学び幼い頃から漢学者から漢詩と作文を習った。彼が儒教を研究していた頃、韓国の政勢は日本勢力に左右される状況にあったが、16歳の時東学の乱が起きた。韓竜雲は東学の乱を経験した後、なぜ仏教に入り僧侶になったのかと後悔したが、日韓併合以降は満州やロシアを巡回し帰国した。帰国後27歳の時に百澤寺に入り、教学的関心を持って八万大蔵経を翻訳した。また中国語・ロシア語で仏教書籍を発行し、他国に布教することに力を注いだ。

韓は、日韓併合後、彼の最も有名な書物である『朝鮮仏教維新論』を発刊し、朝鮮仏教界に改革を呼びかけた。韓は1918年30歳の時、日本を訪問し6ヶ月間東京や京都など各地を巡回した。特にその時、印象に残ったのは、日本仏教の近代化、例えば、仏教界の学校・社会福祉施設などであった。韓は日本見学だけではなく、日本統治下の朝鮮民族の処遇問題にも関心を持つことになり、東京YMCAの朝鮮独立運動に参加し、1919年2月28日「朝鮮独立万歳」運動の発

起人として参加した。「朝鮮独立運動」発起人 33 人の一人だった。

その発起人にはキリスト教指導者が 16 人、仏教界の指導者が 2 人、天道教が 15 人含まれていた。⁽¹⁾ 33 人の中でも韓竜雲の思想行動は他人よりも積極的であった。それは「独立宣言文」に公約三章「行動綱領」によく現れている。ここで「行動綱領」というのは 3・1 運動において各地方の至るところで独立運動を起すための綱領であり、韓竜雲は崔南善ら他の 31 人に頼み、元々公約三章にはなかったが文を付記した。ここで、独立宣言書の全文を示しておこう。⁽²⁾

「われらはここにわが朝鮮国が独立国であること、および朝鮮人が自由民であることを宣言する。これをもって世界万邦に告げ、人類平等の大義を克明し、これをもって子孫万代におしえ、民族自存の正当なる権利を永遠に有せしむるものである。半万年の歴史の権利によってこれを宣言し、二千万民衆の忠誠を合わせてこれを明らかにし、民族の恒久一筋の自由の発展のためこれを主張し、人類の良心の発露に基づいた世界改造の大機運に順応し、並進させるためにこれを提起するものである。これは天の明命、時代の大勢、全人類の共存同生の権利の正当な発動である。天下の何ものといえどもこれを抑制することはできない。旧時代の遺物である侵略主義、強権主義の犠牲となって、有史以来千年をかさね、はじめて異民族による箝制の痛苦を嘗めてからここに十年が過ぎた。かれらはわが生存の権利をどれほど剥奪したであろうか。精神上的の発展にどれほど障壁となったであろうか。民族の尊厳と栄光をどれほど毀損したであろうか。新鋭と独創によって世界文化の大潮流に寄与、補裨できる機縁をわれらはどれほど遺失したであろう。

ああ、旧来の抑鬱を宣揚せんとすれば、時下の苦痛を擺脫せんとすれば、将来の脅威を芟除せんとすれば、民族的良心と国家的廉義の圧縮、銷残とを興起、伸張せんとすれば、各個人的人格の正当な発達を遂げんとすれば、憐むべき子弟たちに苦恥的な財産を遺与せざらんとすれば、子々孫々永久、完全な慶福を尊迎せんとすれば、その最大急務は民族の独立を確実なものとするにある。二千万人民のおのおのが方寸の刃を懐にし、人類の通性と時代の良心が正義の軍と人道の干寸とをもって援護する今日、吾人が進んで取ればどんな強権でも挫けないものがあるか、退いて事をなせばどんな志であれ、のばせないことがあるか。

丙子修好条規以来、種々の金石の盟約をいつわったとして、日本の信のないことをとがめようとするものではない。学者は講壇で、政治家は実際において、わが祖宗の世業を植民地的なもののみなし、わが文化民族も野蛮人なみに遇し、もっぱら征服者の快樂を貪っている。

わが急速の社会の基礎と卓越した民族の心理とを無視するものとして、日本の少義を責めんとするものではない。自己を策励するのに急なわれわれには、他人を怨みとがめる暇はない。現在を網繆するのに急なわれわれには、宿昔を懲辨する暇はない。厳粛な良心の命令によって自家の新運命を開拓しようとするものである。決して旧怨および一時的な感情によって他を嫉逐、排斥するものではない。旧思想、旧勢力に束縛され日本の為政者の功名心の犠牲となっている。不自然でまた不合理な錯誤状態を改善、匡正して、自然でまた合理的な正経の大原に帰そうとするものである。当初から民族的要求としてだされたものではない両国併合の結果が、畢竟、姑息的威圧と差別的不平等と統計数字上の虚飾のもとで、利害相反する両民族間に永遠に和合することのできない怨恨の溝を、ますます深くさせている今日までの実績をみよ。勇明、果敢をもって旧来の誤りを正し、真正なる理解と同情とを基本とする友好の新局面を打開することが、我々の間に禍いを遠ざけ、祝福をもたらす捷徑であることを明知すべきではないか。憤りを含み怨みを抱いている二千万の民を、威力をもって拘束することは、ただに東洋永遠の平和を保障するゆえんでないだけでなく、これによって、東洋安危の主軸である四億の中国人民の日本にたいする危懼と猜疑とをますます濃厚にさせ、その結果として東洋全局の共倒れ、同時に滅亡の悲運を招くであろうことは明らかである。今日わが朝鮮の独立は朝鮮人をして正当なる生活の繁栄を遂げさせると同時に、日本をして邪道より出でて東洋の支持者としての重責を全うさせるものであり、中国をして夢寐にも忘れえない不安や恐怖から脱出させるものである。また東洋の平和を重要な一部とする世界の平和、人類の幸福に必要な階梯となさしめるものである。これがどうして区々とした感情の問題であろうか。

ああ、新天地は眼前に展開せられた。威力の時代は去り道義の時代がきた。過去の前世紀にわたって練磨され、長く養われてきた人道的精神は、まさに新文明の曙光を人類の歴史に投射しはじめた。新春は世界にめぐりきて、万物の回蘇をうながしつつある。凍氷、寒雪に呼吸を閉蟄していたのが一時の勢いであるとすれば、和風、暖陽に気脈を振いのばすこともまた一時の勢いである。天地の復運に際し、世界の変潮に乗じたわれわれは何らの躊躇もなく、何らの忌憚することもない。わが固有の自由権を護り、旺盛に生きる楽しみを享けられるよう、わが自足の独創力を発揮して春風に満ちた世界に民族的精華を結紐すべきである。

われらはここに奮起した。良心はわれらとともにあり、真理はわれらとともに進む。男女老少の別なく陰鬱な古巢から活甍に起来して、万民群衆とともに欣快なる復活を成し遂げようとするものである。千百世の祖霊はわれらを陰ながらたすけ、全世界の気運はわれらを外

から護っている。着手がすなわち成功である。ただ前方の光明にむかって驚進するだけである。

公約三章

- 一、今日われわれのこの拳は、正義、人道、生存、尊栄のためにする民族的要求、すなわち自由の精神を發揮するものであって、決して排他的感情に独走してはならない。
- 一、最後の一人まで、最後の一刻まで、民族の正当なる意思をこころよく発表せよ。
- 一、一切の行動はもっとも秩序を尊重し、われわれの主張と態度をしてあくまでも公明正大にせよ。

朝鮮民族代表

孫秉熙 吉善宙 李弼柱 白龍城 金完圭 金秉祚 金昌俊 權東鎮 權秉惠 羅龍煥 羅仁協 梁甸伯 梁漢默 劉如大 李甲成 李明龍 李鐘一 李昇薰 李鐘薰 林禮煥 朴準承 朴熙道 朴東完 申洪植 申錫九 吳世昌 吳華英 鄭春洙 崔聖模 崔麟 洪秉箕 韓龍雲 洪基兆」

韓は3・1運動に参加した罪で3年間獄中生活をした。日本警察の監視下に文壇生活に入ったが、出獄後の1926年(47歳)に詩集「ニムの沈黙」(恋の沈黙)を発表した。「ニムの沈黙」には88編の詩が収録されているが、大体の内容は民族独立精神陥落するものであった。また執筆生活をしながら49歳には新幹会を結成し、中央委員と京城支会長職を歴任した。キリスト教民族運動家と親睦を結び、日本帝国主義と真正面に闘いを展開した。キリスト教運動者は李始栄・金東三・辛采浩・鄭寅晋・朴圭光・洪命熹・宋月面・崔凡述らがいた。

韓は文人としてまた政治家として活動したが、1944年5月9日、1945年8月15日の朝鮮解放日の1年前に死んだ。

3. 韓龍雲の仏教思想

韓が1910年、日韓併合当時刊行した『朝鮮仏教維新論』は、朝鮮が日本政治の中から抜け出す方法は朝鮮仏教が新しく生まれ変わることであるとの自覚において書かれた。韓はまず朝鮮仏教の刷新を行った。この書名にある「維新」とは、日本明治維新と言う場合のように、新しい政治を行うということではない。韓は、「維新というのは何か。破壊のことであり、破壊というのは何か。維新の母である」と述べているが、⁽³⁾韓の言う「破壊」とはこれまでの朝鮮仏教の思想

を完全に破壊することを意味する。日韓併合時、朝鮮仏教は朝鮮総督府に結びつき、日本的仏教布教の方式で親日的な姿勢で布教を行った。それに対して韓は、まず仏教行政組織を革新しなければならないと主張したのである。

(1) 仏教行政の革新論

当時朝鮮寺刹制度は中央には本寺があって、各地方には末寺があった。この制度はそのまま保存し、中央本寺の制度をまず組織しなければならないと論じた。中央組織には末寺まで支配する総務院長を置き、また日本帝国主義と闘う民族精神を高揚するために各寺刹において、団結する力を持たなければならないと論じた。すなわち統一宗団、組織、規約財政を一本化しようめざした。この制度はその後も保持されており、今日の韓国仏教は中央総務制度と院長の力が強い組織となっている。

(2) 寺院運営の革新

寺刹を運営するためには時代状況をよく知らなければならない。日本帝国の支配下には特に在来式布教方式のためであると論じ、まず念仏堂廃止を主張した。⁽⁴⁾念仏堂とは当時朝鮮仏教寺刹において最も大事にされた祈り堂とであるが、韓は念仏堂でお祈りするだけでは国を救うには足りないと思い、祈りと民族精神が一体にならなければならないという考えから念仏堂廃止論を唱えた。他方、彼は根本仏教教理から見ると宇宙に偏在する法身仏とは特定信仰の対象にならないと論じた。また韓は複雑な陀羅尼の儀式よりも簡単な儀式を身につけ仏の本心はどこにあるか判断し、時代に対して敏感に対応できる現実的信仰人にならなければならないと説いた。

また韓は妻帯制を主張した。当時朝鮮仏教の僧侶たちは単身制、即ち結婚して、家庭を持つことは禁止されていた。韓の考えでは、結婚をしない僧侶は色々な面で不便であり、倫理的・思想的または生物学的面で問題がある。こうして、韓は結婚の妥当性を力説し、自分も結婚して家族をもった。しかし韓の結婚説の影響は一時的であり、日本仏教の妻帯制に反対する韓国の仏教界には、当時は勿論今日までも宗派によって妻帯を認定する宗派もあれば、認定しない宗派もある。また韓は 1914 年から朝鮮仏教青年同盟を結成した。組織綱領において次のように主張されている。⁽⁵⁾

- ・朝鮮寺院を統一して日本帝国思想を拒否すること。
- ・政教分離し、青年の社会進出すること。

- ・山中の念仏僧侶が社会に出て民族精神を持って布教すること。
- ・米国、ロシア、中国、各国に朝鮮寺院を設立し民族教育を行うことを主張した。

また彼は禅教振興論も主張した。仏教の振興のために必要不可欠の要件は仏教修行を確立することであるにもかかわらず、信者の中には、韓国仏教、五教九山（韓国の寺刹）あるいは禅教宗と区別して語るなど、教理と宗旨とは違うと考えるものが多い。しかし禅（修禅）と教（布教）の本質は同じである。なぜなら禅が仏教の心であるのに対して言えば、教は仏教の言葉だからである。このように論争を除去して真の仏心の人々に植え付けることが、韓の禅教振興論の目的であった。

次は經典の外国語での翻訳であるが、韓は、韓国にある世界文化遺産の一つである「八万大蔵經」を当時の現代語で翻訳した最初の人物である。彼は、この他にも朝鮮語で多くの「仏典」を執筆した。

4．神社参拝と韓竜雲

1938 年になると日本政府は「内鮮一致」思想を高揚するために国家神道である神社参拝を強制し、それによって朝鮮民族は霊肉の苦難を受けた。最も苦難を受けたのは朝鮮キリスト教と朝鮮仏教の信者たちであった。キリスト教信者は神社参拝について偶像崇拜だと認識し命をかけて反対した。そのため投獄された人も多かった。少数であるが朝鮮仏教信者にも投獄された人がいた。韓もその一人である。神社参拝に多くの人々を参加させるために、日本キリスト教組合教会は神社が宗教でなく日本民族の精神修養であると宣伝布教を行った。東本願寺などの日本仏教も神社参拝は仏心であり日本民族の精神修養であると宣伝布教した。

朝鮮キリスト教界で一番被害を受けたのは朝鮮無教会信者と福音主義的キリスト教徒であった。⁽⁶⁾ 仏教界では韓をはじめに保守的仏教信徒たちであった。仏教の信徒がキリスト教信者より神社参拝に積極的であったのは、神仏習合思想が朝鮮でも知られていたためであった。

5．おわり

韓竜雲の仏教思想において最も核心的書物は『朝鮮仏教維新論』である。なぜなら、この書物は、韓国仏教における念仏思想から布教思想への変化の動向を明瞭に表しているからである。日帝支配から解放より 60 年たった今日でも、この書物は韓国仏教界の尊敬を広く集めている。

また仏典の韓国語翻訳は韓の業績の中でも最も大きな仕事であり、彼は訳経院の功労者でもあ

る。一部の仏教教団の人々には韓の仏教思想を批判する人々もいるが、彼の妻帯制思想は一部の朝鮮仏教界に大きな影響力を与えた。今日朝鮮仏教団にも妻帯僧侶は多く存在している。

< 参考文献 >

1. 韓哲曦 『日本の朝鮮支配と宗教政策』 未来社 1996 年
2. 尹健次 『朝鮮近代教育の思想と運動』 東京大学出版会 1982 年
3. 金栄作 『韓末ナショナリズムの研究』 東京大学出版会 1982 年
4. 任展志 『日本における朝鮮人の文学の歴史』 法政大学出版局 1994 年
5. 宮田節子 『朝鮮民衆と「皇民化」政策』 未来社 1992 年
6. 韓哲曦・蔵田雅彦共著 『韓国キリスト教の受難と抵抗』 新教出版社 1995 年
7. 金文吉 『近代日本キリスト教と朝鮮 - 海老名弾正の思想と行動 - 』 明石書店 1998 年
8. 姜在彦 『近代朝鮮の思想』 未来社 1984 年
9. 李光麟 『開化期研究』 三信文化 1997 年

注

- (1) 韓国精神文化院「韓国民族文化大百科事典」11 巻 1994 年、37 頁
- (2) 独立宣言文の原文は 1919 年 2 月作成され、ハングル文字英文漢字の混字体であった。以下、朴慶植による日本語訳によって全文を引用することにした（朴慶植「朝鮮 3・1 独立運動」平凡社 1976 年、91 - 92 頁）。なお、引用に当たり、朴慶植の訳を一部訂正した。
- (3) 金敬執「韓国近代仏教史」ケンソウン 1998 年、301 頁
- (4) 韓国精神文化院「韓国民族文化大百科事典」24 巻、1994 年、265 頁
- (5) 韓国精神文化院「韓国人物大事典」11 巻、1999 年、2379 - 2350 頁
- (6) 金文吉「近代日本キリスト教と朝鮮 - 海老名弾正の思想と行動 - 」明石書店 1998 年、150 - 160 頁

(ほう・ゆう 大韓仏教・法然寺住職、京都大学文学部外国人共同研究者)